

## 東北大学の思い出と思い出

NEC ビッグロープ (株)  
代表取締役執行役員社長

飯塚 久 夫



私は1970年、二村研究室の卒業です。直接的には曾根敏夫先生（当時は助教授）にご指導いただきました。ご多分に漏れず、子供の頃から電気通信に興味があり、大学もその方面に進みたいと思っていました。高校時代、東北大諸先輩の偉業が書かれた本や、現役教授による専門教科書がシリーズで出版されました。加えてあるハプニングが起きます。ある日突然耳が聞こえなくなりました。1週間程で回復するのですが、それはショッキングな出来事でした。聴覚の不思議さを身をもって体験しました。電気通信分野でも音響学というのがあり、東北大がそのメッカであることを知り、ひたすら東北大を目指しました。研究室では音響の中でも音響心理学という狭い分野で「両耳相互作用」がテーマでした。耳が左右二つあることによる効果の研究です。卒論の過程で『多くの動物の「まぶた」は閉じるのに「耳たぶ」が閉じない理由は、視覚は目から大脳中枢に到達する迄にシナプスを二つしか経ないが、聴覚は三つ経て相互作用していることが関係している』などと言って研究室の皆さんの失笑を買いました（殆ど冗談ですが、1%程度は今でも本気です）。

遡って、東北大に入った当初は教養部での講義にインパクトを受け、文科系学科も強く興味を持ちました。当時流行でもありましたが、サルトル、ヤスパース、ハイデggerを読み漁り、特にハイデggerの技術論は今日でも私の信条の根幹をなしています。エルンスト・マッハや広重徹の科学論、技術史の影響も受けました。そんなことも加わって専門は音響心理学となりましたが、故あって大学院は東京工業大学に移りました。

東工大の音響系研究室は超音波が主でした。そこで夢の原子炉と言われた高速増殖炉の沸騰音検出の研究をしました。高速増殖炉は普通の原子炉と違って超高温であるため冷却に水でなく液体ナトリウムを使います。万一「泡」でも出来たら直ちに制御棒を挿入しなければならないため、「泡」が潰れる超音波をいち早く検出しようということです。東北大の同じ音響関係でも“耳”でなく“口”すなわち音声の研究をしていた城戸研究室で、高速フーリエ変換 (FFT) のアルゴリズムが使われ

始めていました。東工大ではそれを相関分析と組合わせて「泡」の位置決めに使いました。大変難しい原子炉で、あれから40年近くたちますが、多くの国で高速増殖炉の計画中止に至っています。あの頃は大型計算機が大学に入り始めた時期で、それをブン回して計算していたFFTが、今や携帯音楽プレーヤーの中にまで入って誰でも日常使える状態であるのは、昨今のコモディティ化による若者の電気情報系離れと並んで、慨嘆と隔世の感を禁じざるを得ません。

72年、電電公社に入社して以来、電子交換機開発、通信網計画、NTT 民営化法案検討、マルチメディア構想策定、資材調達業務、USTR との国際調達交渉、インターネット事業立上げなどに従事。99年、NTT コミュニケーションズ発足以降は、OCN 事業の普及・拡大、IPv6 や通信放送連携などブロードバンド/ユビキタス時代のコアとなるサービス・技術の開発をやってきました。特に01年以降、NTT が提供しているTV中継網（全国の放送局約200局を結び、TV放送の伝送と切替を行うサービス）のデジタル化再構築に取組み、05年の全国展開を可能としました。しかしこれは終生忘れ得ぬ困難な仕事でした。というのは、ハード、ソフトともにその開発規模の大きさもさることながら、定められた絶対タイムリミット、超ミッションクリティカル性（全国津々浦々、いかなる故障・事故が起きても国民視聴者には影響を与えないように復旧出来ること）など想像を絶する仕事でしたが、結果的にNTT、Sler、メーカー、それらの開発者、設計者、工事者、保守者がパワーを結集し一丸となって事に当たると、まさしく『なせばなる』ことの要諦を教えてくださいました。

07年、35年勤めたNTTを辞めて「NEC ビッグロープ」に移りました。インターネット・プロバイダー事業です。この事業はこれからも夢と希望に溢れた分野ですが、特に日本においてはインターネットの普及過程において「無料」という概念が蔓延っているため、産業的には大きな課題を抱えています。ビッグロープも約600万人の有料接続会員を頂く一方で、“BIGLOBE ストリーム”という映像配信事業は、その会員は800万を超えていても、殆ど無料のプログラムで行わざるを得ないといった状況にあります。全体では1600万のお客様のご支援を頂いており、NGN（次世代ネットワーク）など、ますます技術を活かしてより魅力あるサービスを創造していくことが引き続き課題です。

いずれにしても、こうした人生を歩んで来ることが出来たのは、前半に述べたような「常にクリエイティブなマインドを忘れず、技術屋であっても文化の大事さを教えてくれた東北大の総合性・学風」のおかげと、改めて東北大学で学べたことの貴重さをかみしめているこの頃です。